

紫明抄卷第二 自若は紫明

源氏物語卷三十一

第153回 鶴見大学図書館・源氏物語研究所貴重書展

令和2年1月15日(水) - 2月15日(土) \*1月17・18日閉館

8時50分 - 21時00分 (土) 18時00分迄 (回覧閉館)

# 源氏物語の「競<sup>き</sup>ひ<sup>ほ</sup>」

「講演会」2月15日(土) 13時 - 14時 B1Fホール

田口暢之(文学部講師) \*無料・事前申込不要

「木枯らしに吹きあはす笛の音」 「雨夜の品定め」の和歌解釈



CLIII  
THE RARE BOOKS EXHIBITION  
"COMPETITION IN THE TALE OF GENJI"  
JAN.15-FEB.15

[主な展示品] 『源氏物語』(54巻54帖・[江戸中期]写) 『源氏物語』(蓬生 胡蝶 総角・[室町後期]写) 『源氏物語かるた』([江戸後期]写) 素寂『紫明抄』(存巻2・[鎌倉後期]写) 能登永閑『源氏物語聞書』([寛文3年]京八尾勘兵衛刊) 『源氏大和絵鑑』(菱川師宣画・貞享2年 江戸 鱗形屋刊) 『源氏絵合』(宝暦4年序刊 [大坂]) 等  
◇日本文学研究科の大学院生・ドキュメンテーション学科の学生が解題を執筆しています◇

## ご挨拶

あけましておめでとうございます。初春恒例の展示は源氏物語を主題としております。源氏物語は1000年以上にわたり、時代の中で毀誉褒貶はありながら読み継がれてきました。しかし、他の古典籍と同様に、作者紫式部自筆の本がそのまま現在に伝わったわけではありません。それでも今日作品として読めるのは、平安時代から江戸時代に至る数百年もの間、数え切れない数の人々が書写し、幾種類もの版本や活字本が刊行されてきたからなのです。源氏物語に限らず、現代の日本に於いて古典作品が当たり前のように読めるのは、当然ながらそれを記した書物が大切に受け継がれてきたからです。それは世界の中では必ずしも当たり前ではなく、そこに日本人の一面が窺えるのだと言えるでしょう。

源氏物語研究所は源氏物語とその享受資料や関連文献を収集し、書物に即した基礎的調査を行い、また広く学内外に公開することを大きな仕事の柱としております。古典籍の収集に努力いたしますのは、上記のように書物こそが確実に学問を支え、研究を進めるための基盤となるからです。

今年はいよいよ東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。各国の選手たちが手に汗握る熱い試合を見せてくれることでしょう。

源氏物語の中にもさまざまな競争が登場します。平安時代の球技としては蹴鞠が有名でしょうが、貴族の競争はそれだけではありません。そこで今回は「源氏物語の「競ひ」と題し、貴族が趣向を凝らしていろいろなことを競い合う場面をご紹介します。現代のスポーツとはひと味もふた味も違う王朝の「競ひ」をどうぞお楽しみください。

2020年1月

源氏物語研究所所長 中川博夫

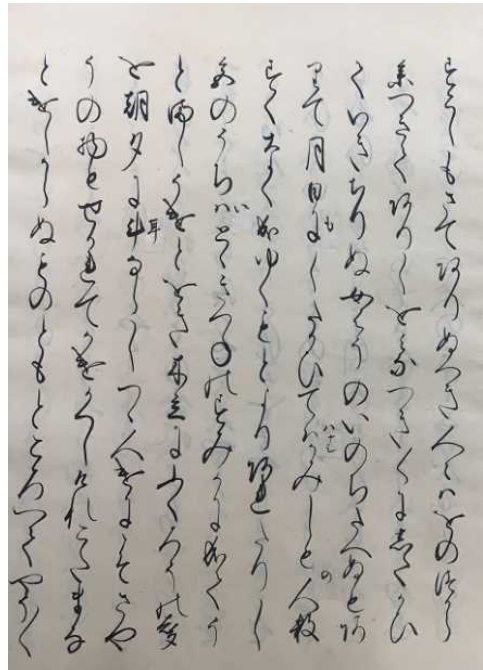
## 目次

I 新収の『源氏物語』……………1頁	IV 刊行された注釈書……………10頁
——季節・薫物・恋・かるた・暮の「競ひ」	——弓・絵巻の「競ひ」
01『源氏物語』〔江戸中期〕写	11『湖月抄』延宝元年〔1673〕跋刊
02『源氏物語』〔室町後期〕写	12『源氏物語聞書』〔寛文3年〔1663〕〕刊
	13『源氏男女装束抄』享保2年〔1717〕跋刊
II 出版された全本文……………5頁	V さまざまな絵入りの梗概書……………12頁
——騎射・舞・雅楽の「競ひ」	——舞・競馬の「競ひ」
03『源氏物語』〔慶長中頃刊〕*伝嵯峨本	14『源氏小鏡』明暦3年〔1657〕刊
04『源氏物語』承応3年〔1654〕刊	15『おさな源氏』寛文10年〔1670〕刊
05『源氏物語』万治3年〔1660〕跋刊	
III 古注釈の世界……………8頁	VI 楽しまれた『源氏物語』……………14頁
——解釈・注釈の「競ひ」	——場所取り・蹴鞠・絵合の「競ひ」
06『紫明抄』存巻二（若紫巻）〔鎌倉末〕写	16『金玉源氏絵宝枕』〔正徳3年〔1713〕〕刊
07『河海抄〔抄出〕〕存下冊〔室町後期〕写	17『源氏大和絵鑑』貞享2年〔1685〕刊
08『花鳥余情抄出』〔室町後期〕写	18『源氏絵合』宝暦4年〔1754〕序刊
09『弄花抄』存桐壺巻～葵巻〔室町後期〕写	
10『三源一覽存巻2〔室町後期〕写	凡例・担当者一覽等……………16頁

# I 新収の『源氏物語』——季節・薫物・恋・かるた・碁の「競ひ」

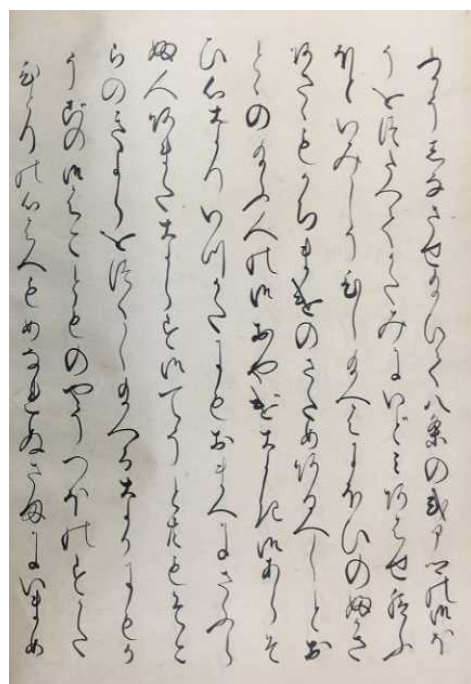
## 01 『源氏物語』54巻54帖〔江戸中期〕写 綴葉装 \*黒塗箱入。

登録番号 1401898。紺紙金泥下絵表紙。縦 23.0×横 16.8cm。外題、表紙左肩の金泥雲霞引き金箔散らし題簽(13.8×3.3cm)に、本文と同筆で各巻名を墨書。内題なし。本文料紙、斐紙。見返し、本文共紙。遊紙、前1丁・後0丁。毎半葉10行、和歌は改行して2字下げで書きはじめ、末はそのまま地の文に繋げる。字高、約19.1cm。奥書なし。蔵書印なし。全帖、一筆と見られる。



ほとんどの巻に濁点や和歌の作者名などの書き入れがあり、一部の巻には本文の訂正や異同を記した貼紙も見られる。たとえば右に掲出した蓬生巻(源氏物語大成520頁)の4行目「月日に」を「月日も」とする伝本は見当たらない一方、「したかひては」を「したかひて」とするのは青表紙本の大半、河内本と別本の諸本である。「かみしもの」も青表紙本・河内本に目立つが、続く「人数」が青表紙本諸本「人数」と一致するのに対し、河内本諸本「人\数」とは対立する。6行目「は」、8行目「斗」は他本と比較しても、意味的にも傍記「い」、「耳」が自然であり、異文注記でなく本文訂正であろう。

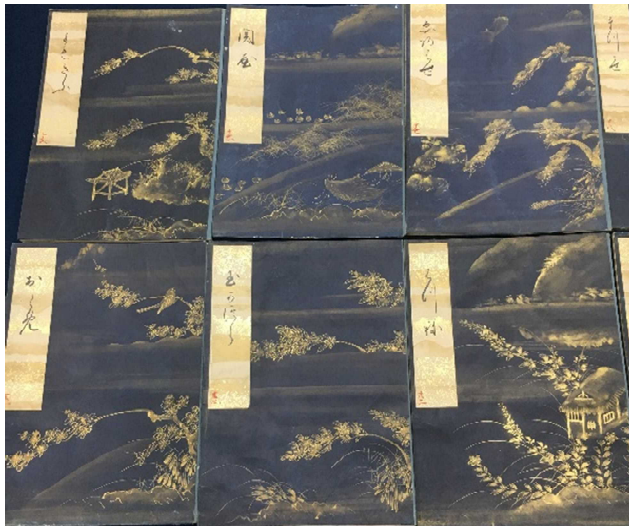
少女巻では光源氏の大邸宅「六条院」が完成する。通常邸宅の4倍の規模で、4つの邸宅にはそれぞれ春夏秋冬にふさわしい庭が配される。そして、各邸宅にはその季節を好む女君が住むこととなり、春の邸宅には紫上、秋の邸宅には中宮(六条御息所の娘。梅壺女御)が住む。ここで『万葉集』の時代から見られる春秋優劣論が繰り広げられる。春と秋とどちらがより素晴らしい季節か論争するのである。秋を好む中宮(これにより「秋好中宮」と通称される)は春を好む紫上へ、秋の草花や紅葉とともに、秋の素晴らしさを詠んだ和歌「心から春まつそのはわがやどの紅葉を風のつてにだにみよ」を贈る。一方、胡蝶巻では紫上が、桜や山吹の花とともに、それへ反論する和歌「花ぞのゝこてふをさへや下草に秋まつ虫はうとくみるらん」を贈って、結局、春に軍配が上がった。



ところで、貴族は薫物(お香)に対する関心も高く、香木などを独自に調合し、オリジナルの香りを衣服にたきしめることも珍しくなかった。左に掲げた梅枝巻では、光源氏が女君たちに独自の薫物を調製させ、自らも紫上と一緒に調合する。そして、3~4行目「にはほひのふかさゝあさゝもかちまけのさためあるへし」と、優劣を決めようとする。その熱心さは5~6行目「ひとの御おやげなき御あらそひ心」と語り手に揶揄されるほどであった。というのも、源氏の娘である明石の姫君の裳着と入内が間近に迫っていたからである。たとえ東宮の寵愛を他の姫君と争うことになっても、薫物などの調度類で明石の姫君に引けをとらずまいという親心が、「親げなき」心の背後に見え隠れする。

(海野)



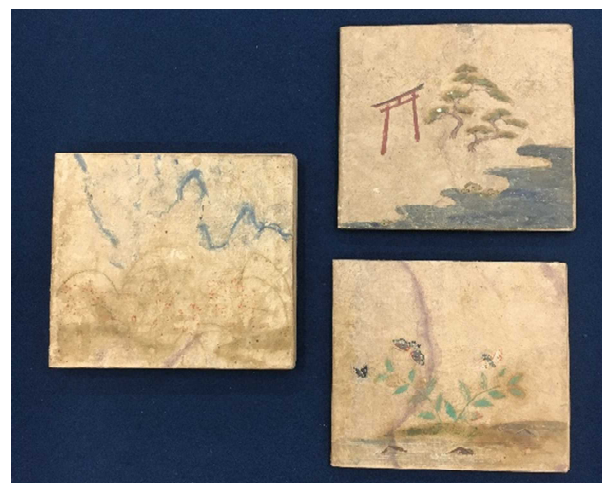


02 『源氏物語』3巻3帖（蓬生・胡蝶・総角存）〔室町後期〕写 綴葉装\*絵表紙。胡蝶は別本。

二重箱入りだが、外箱は転用されたものらしく、蓋の中央に「後光厳院殿御筆／源氏大鑑 三」という墨書、左下に「ヌ廿号」という貼紙をもつ。内箱、漆箱。まず、3帖すべてに共通する書誌を記す。表紙は雲紙を切断したようで、青と紫の部分が見える。本文料紙、斐楮交漉。見返し、金泥霞引き金銀箔野毛散らし。毎半葉11行、和歌は改行して2字下げで書きはじめ、末はそのまま地の文に繋げる。奥書なし。蔵書印なし。こうした絵表紙の本としては比較的古いものか。また、蓬生巻と総角巻は青表紙本系の本文と見られるが、胡蝶巻は別本に分類できる点が注目される。

【おもて表紙】

【うら表紙】

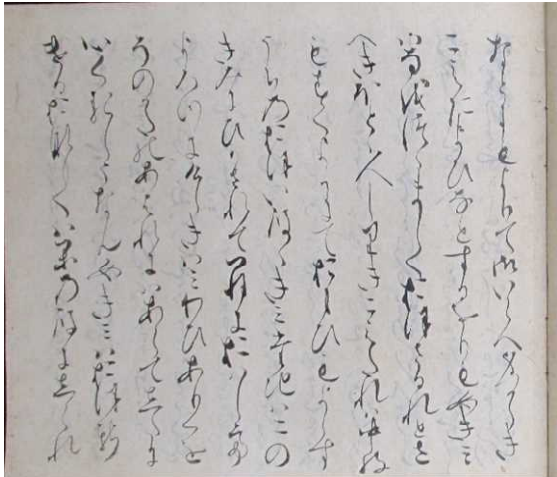


以下、各帖の書誌を記す。

【蓬生】登録番号 1392808。1帖。竜頭鷓首の浮かぶ水辺に鳥居と松を描いた表紙（裏表紙は水辺に鳥居と松を描く）。縦10.3×横11.7cm。外題なし。内題なし。墨付31丁。遊紙なし。字高、約9.1cm。

【胡蝶】登録番号 1392809。1帖。水辺に蝶7匹と草を描いた表紙（裏表紙は水辺に蝶3匹と草を描く）。縦10.0×横11.5cm。外題、表紙中央に「こてふ」と打付書。内題なし。墨付34丁。遊紙、前3丁・後1丁。字高、約8.8cm。

【総角】登録番号 1392810。1帖。草花を描いた表紙（裏表紙にも草花を描く）。縦10.4×横12.0cm。外題、表紙中央に「あけまき」と打付書。内題、前遊紙表の中央に「あけまき宇治三」と墨書（本文、外題とは別筆）。墨付120丁。遊紙、前1丁・後4丁。字高、約9.2cm。



「胡蝶」は、上述のように別本に属す。別本としてはほかに麦生本・阿里莫本・陽明本・保坂本が知られている。

源氏は実父の内大臣に内緒で玉鬘を引き取ったため、内大臣の子息らは実の姉妹と知らず、夕霧に「ひかされてつねにおはして」（掲出画像 7 行目。源氏物語大成 788 頁）、玉鬘に懸想する。この部分、青表紙本・河内本の諸本と別本の保坂本は「ひかれて」、別本の陽明本は「ひかされつ」とするが、別本の麦生本・阿里莫本は「ひかされてつねにおはして」と完全に合致する。全体を調査しても、両本との共通点が目立つ。たとえば 4~5 行目「中将もす

くよかにて」は両本と河内本諸本に合致するが、青表紙本諸本と他の別本は「中将はすくしくくて」とする。このように、麦生本・阿里莫本と同じく河内本に近い別本と言えるが、両本と異なる本文も散見するため、直接の書承関係は認めにくい。その点では別本として独自の価値を有するといえよう。（海野）

### 参考展示 1 『源氏物語かるた』 1 組 108 枚（読札・取札各 54 枚）〔江戸後期〕写

登録番号 1204745。緑地に小葵・唐花の緞子、銀のコハゼという贅沢な四方織り込み帙（縦 7.8×横 5.6×高さ 6.5cm）入り。銀覆輪厚手料紙（縦 7.6×横 5.1cm）の表面に金箔散らしの白斐紙を使用。『源氏物語』各巻の代表的な和歌 1 首を選び、読札には巻名・上句・絵を、取札には下句を書く。読み札に描かれた絵は当該巻と関係の深い事物（植物・調度・風景）であり、人物を登場させない留守模様の洒落た趣向とする。構図、色遣いともに、品良くまとまっている。保存状態は極めて良く、遊び道具というより飾り物であった可能性が高い。なお、このカルタは絵の主要な輪郭線が木版摺となっており、これと同版のものとして宝鏡寺蔵「源氏物語かるた」・早稲田大学図書館蔵「源氏かるた」が知られる。



読札の中には、連続する複数の巻をつなげると 1 つの絵に見えるものがある。たとえば、明石と滲標をつなげると 1 つの海、玉鬘と初音をつなげると 1 つの山、寄生（宿木）・東屋・浮舟・蜻蛉をつなげると 1 つの川が浮かび上がるようである。他方、須磨・明石、若菜上・下といった物語の内容上の関連が強い巻々の絵はつながらないようで、その点も興味深い。

また、若菜の札は 2 枚あるが、巻名は「若菜」・「若な」と記すだけで、上下の別は記さない。しかし、一方には若菜上の巻名由来歌「小松はらすへのよはひにひかれてや」（読札）、「野辺のわかかなもとしをつむへき」（取札）が書かれ、もう一方には若菜下の引歌「ゆふやみはみちたとし月待て」（読札）、「かへれわかせこそそのまにもみん」（取札）が書かれており、上下の区別がなされている。下には作中歌でなく引歌を記したのも、明確に区別する工夫か。なお、これは展示品のみの特徴ではなく、江戸期のかるたに共通する旨が先行研究により指摘される。（河田）

【参考文献】塩出貴美子「『源氏物語かるた』考—源氏絵の簡略化・抽象化・象徴化—」（『奈良大学紀要』第 41 号、2013 年 3 月）



### 参考展示2『源氏物語絵』(空蟬)額装1面〔江戸中期〕制作



原簿記載番号H-66。型押し金箔を雲形に加工し、画面上下にあしらう。画面上下と画面右にある金箔散らしの霞は後補か。顔料の落剥もなく保存状態は良好、元来は屏風であったか。豪華絢爛な全体像が偲ばれる。屏風や障子絵を軸や額、または画帖に仕立てる例は多いため、この種の資料調査にあたっては現在の形状にとられない考察が必要である。絵の全体は純然たる大和絵だが、画中の襖や屏風に描かれた絵は狩野派風の唐絵となっている。このような技法の併用は、奈良絵本にもしばしば見られるところである。

暮に興じる空蟬と軒端萩を、光源氏が垣間見する場面。光源氏 17 歳の夏である。正面から見て左手が空蟬、右手が軒端萩、手前には桂姿の女房が控える。戸口に光源氏と空蟬弟の小君が立つ。『源氏物語』本文に「しろきうす物のひとへかさね、二あひのこうちきだ

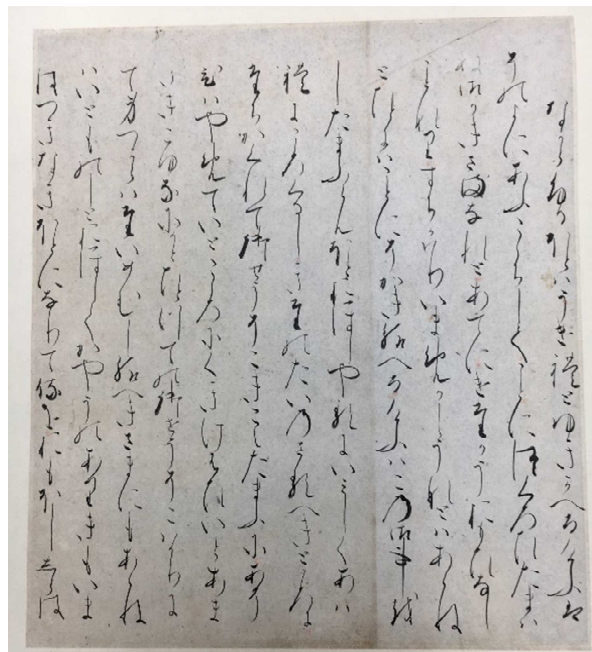
つものないがしろにきなして、くれなゐのこしひきゆへる」(源氏物語大成 87 頁)と描かれるように、軒端萩はかなり略装であったはずだが、この絵では整った女房装束姿で描かれている。一方、「いとしろうおかしげにつぶつぶとこゑてそゞろかなる人」(同頁)という軒端萩らしい、豊かで大柄な姿は忠実に表現されている。空蟬も「かしらつきほそやかにちいさき人」(同頁)と描かれるとおり、小柄でほっそりとした姿になっている。(河田)

### 参考展示3『源氏物語断簡』(賢木)軸装1軸〔鎌倉中期〕写 \*河内本。

登録番号 0342086。伝藤原為家筆大四半切。縦 30.3cm ほどの綴葉装断簡 2 葉を合装。5、6 行目の間に呼び継ぎの跡が見える。しかし、右 5 行(幅 10.0cm)は賢木巻後半の桐壺院一周忌に光源氏と藤壺が和歌を贈答する場面(源氏物語大成 364 頁)である一方、左 8 行(幅 16.6cm)は賢木巻冒頭の光源氏が六条御息所のいる野宮を訪問する場面(源氏物語大成 335 頁)で、物語が連続しない。呼び継ぎの際に物語の連続性をあまり意識しなかったか、あるいは単なる貼り誤りか。

本文は河内本系統である。平安後期、すでに『源氏物語』の本文には乱れが生じていた。源光行・親行の父子は複数の写本を校合して本文を整定した一方(これが河内本)、藤原俊成らの意見を取り入れつつ注釈書も作成した。所々に薄く見える朱点は文の句切れを表し、彼らのひとつの研究成果と言えよう。ただし、向かい合った面の朱点がうつつたり、装潢の段階で流れたりすることもあるので、扱いには注意を要す。

鎌倉時代の『源氏物語』は、河内本が四半本、藤原定家の整定した青表紙本が六半本(枅型本)に書写されることが多く、本文系統と書物の形が密接に連動する傾向にある。(河田)



## II 出版された全本文 —— 騎射・舞・雅楽の「競ひ」

### 03 『源氏物語』 大本 17 帖 17 冊存〔慶長中頃 [1600 頃] 刊〕 \* 伝嵯峨本

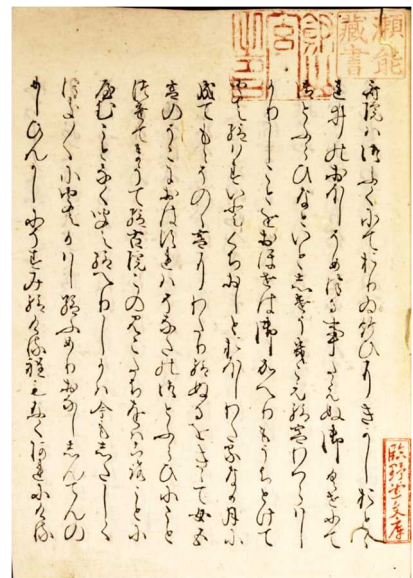
近世初期に京都嵯峨で出版された、主に木活字を用いて刷られた版本を嵯峨本と呼ぶ。嵯峨本は、寛永三筆と呼ばれ能書家としても知られる本阿弥光悦風の書体や、雲母刷りの表紙など豪華な装訂を有する。ところで、本書を嵯峨本とする立場もあるが、一般的には「伝嵯峨本」と称される。それは、川瀬一馬氏によって、他の嵯峨本と比較すると、本書は活字が小ぶりで字間が狭く、のちに刊行された整版の源氏物語に近いことなどから、影響を受けてはいるものの嵯峨本と呼ぶことは不相当との見解が呈されたことによる。文禄より慶安ごろ（16 世紀末から 17 世紀初め）までの間に刊行された木活字本を古活字本と呼び、とくに源氏物語の古活字版は異版が多いことで知られるが、慶長中頃（1600 頃）に刊行されたこの伝嵯峨本と、元和 9 年（1623）に刊行された元和本は、代表的な古活字版の源氏物語として位置づけられる。なお、慶長初年に出された古活字 10 行本が、最初に刊行された『源氏物語』とされる（国会図書館等蔵）。

さて、本学が所蔵する伝嵯峨本『源氏物語』には 3 種ある。淡青色表紙の「朝顔」（横浜市立大学第 4 代学長の三枝博音旧蔵本か）、茶色表紙の「真木柱」、卵色表紙の「花宴・花散里・松風・薄雲・朝顔・胡蝶・螢・篝火・野分・横笛・夕霧・御法・紅梅・浮舟・蜻蛉」の 3 種、計 17 帖である。このうち、卵色表紙の「胡蝶」は改装と思しく、表紙の色が他の卵色表紙とは異なる。なお、淡青色表紙と卵色表紙の題簽には雲母刷の料紙が使用されているが、茶色表紙の「真木柱」には同様の特徴を見いだせない。

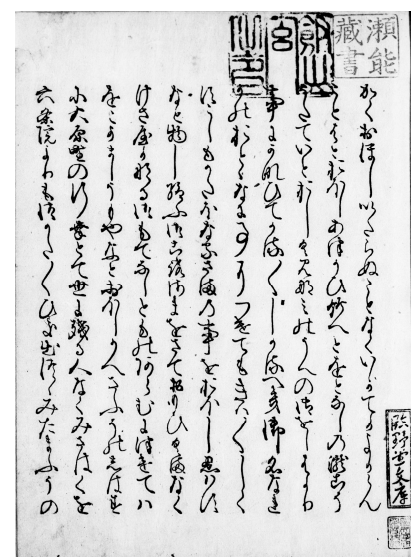
ところで、本学の卵色表紙の本には、「瀬能蔵書」「臨野堂文庫」「飯山宮之印」という 3 つの印記が押されているが（図 A）、同じ蔵書印が国文学研究資料館に所蔵される「行幸」にも確認できることから、本書のツレであると考えられる（図版 B「日本古典籍データセット」国文研蔵、提供「人文学オープンデータ共同利用センター」<http://codh.rois.ac.jp/>）。

展示箇所は「螢巻」で、六条院（源氏の邸宅）の夏の町にある馬場で、五月の節会に催された騎射の様子が描かれる。源氏が花散里へ「中将の、けふのつかさの手つかひのつゝめでに、をのこも引きつれて物すべきさまにいひしを、さる心し給へ。」と語るが、「手つかひ」とは競技者を左右に分けて行う取組のことで、「つかさの手つかひ」で「左近衛府の競射」を意味する。源氏は、近衛府の官人たちが競技の後に、花散里たちが住んでいる夏の町へ大勢やってくるだろうから、そんなつもりで仕度をさせて欲しいと伝える。挿絵には、端午の節句の装いや、撫子襲の汗衫といった、さまざまな美しい装いの人々の前で、男たちが馬上で競い合う様子が描写される。少し遅れて源氏も登場し、童女だけでなく親王も注目するなかで競射を行った。（槻木・土田）

【参考文献】川瀬一馬『増補古活字版之研究』(The Antiquarian Booksellers Association of Japan, 1967 年)



【図 A】 鶴大本



【図 B】 国研本



04『源氏物語』大本 60巻 60冊 承応3年 [1654] 刊 (京都、八尾勘兵衛) \*絵入・箱入

原装紺色無地表紙 (27.2×18.3 cm)の中央に刷題簽を貼付する(一部、後補書題簽)。刊記「承応三甲午稔八月吉旦/洛陽寺町通/八尾勘兵衛開版」(図版参照)。本文に加え、『源氏目案』3巻、『山路の露』『源氏物語引歌』『源氏系図』を1巻ずつ付す。後代の書籍や絵画に、多大なる影響を与えた「絵入源氏物語」として知られる。

成立当時より数多の人々に愛されてきた『源氏物語』は、江戸に開花した出版文化によって幅広い層の人々にも読まれるようになった。江戸時代にはさまざまな『源氏物語』が刊行されたが、「絵入源氏物語」と称される挿絵入りの版本には、大本・横本・小本の3種がある。このうち、大本の絵入源氏物語は、慶安3年(1650)に山本春正(1610~82)が記した跋文が付され、挿絵も蒔絵師としても知られる春正によると考えられることから、「慶安本」と呼ばれる。

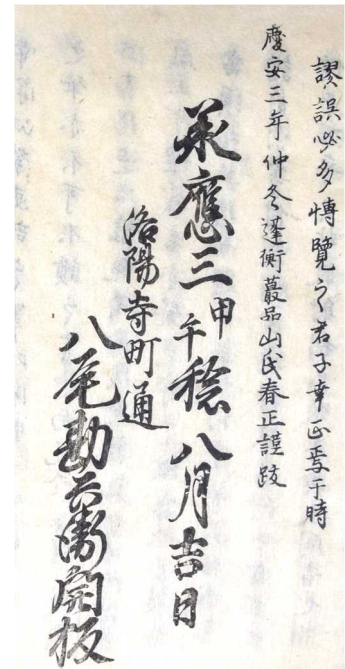
その刊記には、(1)無刊記版、(2)承応3年(1654)八尾勘兵衛版、(3)出雲寺和泉掾版の3種があり、(1)の無刊記版が初版であり、つづいて(2)の承応3年版のうち、折り目に巻名(漢字表記)と丁数が記される版式A版が刊行され、その後ノドに巻名記号(カタカナ)と丁数が記される版式B版が刷られた。そして、版式B版を有する(3)の出雲寺和泉掾版が、後になって出された。このほか、版式Bを有する無刊記本も報告される。つまり、大本の絵入源氏物語には5種の版が確認されているが、このうち鶴大本は承応3年の刊記を有し、ノドに巻名・丁数がある版式B版であることから、3番目に刷られたものであることがわかる。

跋文を記した山本春正(1610~82)は、江戸初期の蒔絵師、地下歌人、国文学者である。松永貞徳(1571~1654)のもとに弟子入り、後に長嘯子に接近して、その家集『挙白集』を出版した。だが、この家集の刊行を快く思わない貞徳門下から攻撃を受けた。そのような折に刊行されたのが、本書である。春正による跋文の一部を現代語訳で示すと以下の通りとなる。

源氏物語は諸家の本によって異同があり、清濁もわかりにくいので読みづらくなっているがこれは非常に残念なことである。私は若いころから和歌の道を志していたので、俊成の詞(六百番歌合の判詞「源氏みざる歌よみは遺恨のことなり」)に従って源氏物語に心を染めた。解釈できない所は貞徳先生から直接講義を受け、盟友に疑問箇所を教わりながらほぼ梗概を会得した。(中略)古来からある絵図は物語の歌や詞の最も印象的な箇所を描いているが臆見によってさらに図を増した。僭越の罪は逃れたいが、図で事柄を知り、事柄で意味を理解できるなら、婦女子の助けくらいにはなるであろうか。源氏物語は和歌を志す人の必読書である。今、ここに山路露、系図、目案等を添えて上梓し、広く世に伝えたい。これは利益の為ではなく、志を同じくする人を得たいからである。なお誤謬は多いかと思うが、博識の人々よ、正してくだされば幸いである。慶安三年仲冬 山本春正謹跋

跋文の内容や、貞徳の在世中に刊行されたことなどから、春正なりの貞門への弁明の意図が、本書の背景にはあったのではないかと考えられている。なお、承応3年に刊記が入れられた理由について先行研究は、この時期の八尾は限定品であった私家版の版木を求めて、部数を多くして売り出しており、承応3年版に「八尾勘兵衛開板」とあるのは、絵入源氏が初めて出版されたということではなく、初めて市販されたという意味ではないかと推測する。確かに近世初期の無刊記本の多くは、私家版として刊行されたのであろう。しかしながら、八尾が私家版を求めたか否かについては、当時の上方出版界の状況を踏まえ、より慎重に考える必要がある。(蔵野・佐保田)

【参考文献】清水婦久子『源氏物語版本の研究』(和泉書院、2003年)



【図版】鶴大本(刊記)



05『源氏物語』横本 58巻 29冊 万治3年[1660]跋刊(京都、林和泉掾) \*絵入・箱入。

紺地無地表紙(14.7×21.3糎)の中央に刷題簽を貼付する。複数の帖を合冊するが、分量の多い巻については、1帖1冊仕立てとなっている。本文25冊、『目案』3冊、『源氏系図』『山路の露』1冊の、計29冊。挿絵入りの版本『源氏物語』としては、前掲の大本のほかに、この横本と別に小本が知られる。横本には万治3年(1660)の跋文が付されることから、「万治本」とも呼ばれる。

万治本と先行する慶安本(展示4)とは、本文・挿絵とも極めて似ているが、慶安本にあった山本春正による跋文が万治本では省略され、代わりに「今此開版之本者桃華老人／写於校合之卷卦者頓阿／法師寄於六半之形梓」と記されている。

また、挿絵の構図も万治本と慶安本は酷似するが、詳細に比較すると、両書の違いが浮き彫りとなる。例えば、挿絵は両書とも同数であるものの、万治本は横本であるため慶安本の縦長の挿絵の上下を省いたり、左右に描き足したりしている。慶安本では挿絵の上下に雲霞が描かれることが多いことから(図版参照)、横本にすることでその無駄を省けるようにも考えられる。しかし、実際に慶安本の上下を切り取った万治本の挿絵は、物語の重要な景物(例えば「月」)までもが省かれていることがある。もし、万治本が慶安本と同じく、春正の手によるものならば、物語の重要な景物を落とす筈はない。それゆえ、万治本の編集は挿絵の意味や、物語の内容を十分に理解しない者が、慶安本の挿絵を写し、機械的に画面の大きさに合わせて作成したのではないかとされている。

さて、万治本には2種あり、一つは洛陽本といわれる初版の「かしは屋渡辺忠左衛門版」、もう一つは後に版行された「林和泉掾版」である。鶴大本は後者にあたり、跋文末の「龍集万治三年庚子／除年一日」に続けて「林和泉掾行板行」とある。この版は現存数が多く、流布したことで知られる。林和泉掾は、出雲寺和泉掾とも称した京都を代表する書肆であり、禁裏御用と徳川家の御書物師を勤めた名門であった。京都と江戸とに店を持ち、江戸の出店は元禄11年(1648)から明治15年(1882)まで続いている。なお、『増益書籍目録大全』に「源氏物語絵入 半切」の欄に「三十冊 いづみ」と記されていることから、遅くともこの目録が刊行された元禄9年(1696)には、林和泉掾によって万治本は刊行されていたことがわかる。(井上・大竹)

04と05の展示箇所は、「紅葉賀」と「末摘花」の同場面である。挿絵には、光源氏と頭中将が青海波の舞で競演する様子と、同じ二人が末摘花という女性をめぐり、雅楽で競う様子が描かれている。「末摘花」の挿絵で、左側に座り背を向けている男性が光源氏で、その光源氏と対面するように描かれている男性が頭中将と思われる(図版参照)。頭中将は、光源氏の従兄・親友・義兄であるが、恋のライバルでかつ政敵でもあった。ゆえに、物語中には、競い合う二人の様子がたびたび描写される。

さて、大本の挿絵は、前述した通り、江戸時代初期に活躍した蒔絵師で古典学者の山本春正(1610～82)によって画かれたものである。実際に横本の同場面と比較すると、両書の構図が極めて似ていることがわかる。しかし具に見ると、横本は大本の挿絵をそのままに間延びさせたり、考えもなしに切り取っていたりと、杜撰な箇所がある。さらに、横本からは春正の名が消えていることなども合わせて考えると、挿絵のみならず、その編集と出版のすべてにおいて、春正は横本の制作には関わっていなかったものと考えられる。(井上・大竹・蔵野・佐保田)

【参考文献】清水婦久子『源氏物語版本の研究』(和泉書院、2003年)



【図版】慶安本「末摘花」

### III 古注釈の世界 —— 解釈・注釈の「競ひ」

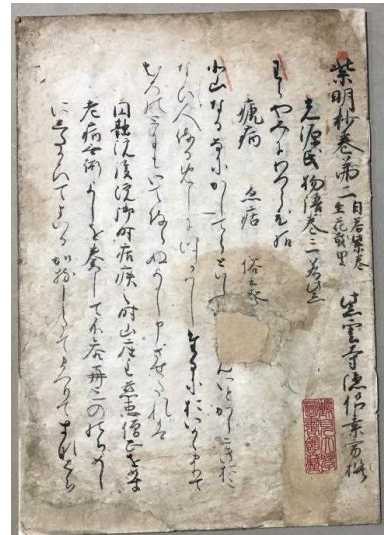
#### 06『紫明抄』素寂著 存巻二（若紫巻）〔鎌倉末〕写

綴葉装1括8丁のみの断簡。縦25.5×横17.5cm。料紙、斐楮交漉紙。毎半葉10行、字高約21.0糎。内題「紫明抄巻第二（自若菜巻／至花散里） 紫雲寺隱侶寂撰」。

素寂が永仁元年（1293）に鎌倉幕府八代將軍久明親王の命を受けて執筆。翌年の五月に完成品を進上した。著者素寂は、源光行の子であり、河内本『源氏物語』校訂者の親行の弟（参考展示3『源氏物語断簡』を参照）で、京での宮仕えの後、鎌倉・紫雲寺の住職となる。そこで、家学である『源氏物語』に親しみ本書を執筆。注は語句、引歌、漢故事、準拠（桐壺帝のモデルを醍醐天皇とするのは07『河海抄』に先駆ける）にわたる。

鶴見大学本は若紫巻のみの断簡であるものの成立期に近い古写本であり、慶応義塾大学附属研究所斯道文庫本零本と同様に資料的な価値は高い。（蔵野・佐保田・槻木・土田）

【参考文献】「慶應義塾図書館蔵〔鎌倉末南北朝〕写『紫明抄』存巻一零本： 解題篇（一）」（『斯道文庫論集』30号、1995年1月）



#### 07『河海抄〔抄出〕』四辻善成著・宗祇編 存下冊〔室町後期〕写 \*延寿王院旧蔵

袋綴1冊。栗皮色表紙（縦23.6×横17.2cm）。表紙中央打付書「河海抄 共二冊」。内題なし。料紙、楮紙。毎半葉12行、字高約21.2糎。印記、「延寿王院」（巻首）。宗祇による抄出本で、08『花鳥余情抄出』と僚冊（09参照）。残念ながら上冊を欠いている。

著者四辻善成は公家、歌人、学者。尊雅王（順徳天皇の孫）の子で、関白二条良基の猶子。嘉暦元年（1326）～応永2年（1395）、77歳。貞治年間（1362-1367）に足利幕府2代將軍足利義詮の命により執筆、献上。書名「河海」（『和漢朗詠集』山水「河海は細流を擇ばず、故に能く其の大を成す」〈黄河や東海の深さは細流を厭わないことによる、の意〉）が示すとおり、藤原定家の『奥入』や06『紫明抄』等の先行する注の集成書的な性格を有する。（市川・木村・平間・水元）

#### 08『花鳥余情抄出』一条兼良著・宗祇編〔室町後期〕写 袋綴2冊 \*延寿王院旧蔵

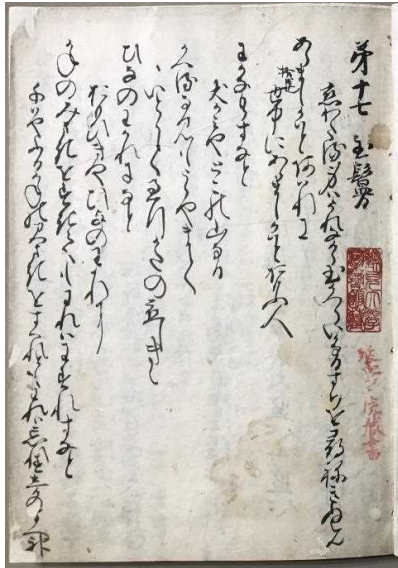
袋綴1冊。栗皮色表紙（縦23.5×横17.2cm）。表紙中央打付書「花鳥余情 共二冊」。下冊には「河海抄 共二冊」と墨書されていて、08の表紙を流用していることがわかる。内題、「花鳥余情第幾抄出」。料紙、楮紙。毎半葉12行、字高約21.2糎。印記、「延寿王院」（巻首）。

著者一条兼良は公卿、古典学者。応永9年（1402）～文明13年（1481）、80歳。応仁の乱勃発後、疎開先の奈良にて執筆。文明10年（1478）に後土御門天皇に献上。序文に07『河海抄』の漏れや誤りを補い、訂正するためと執筆動機を記す。

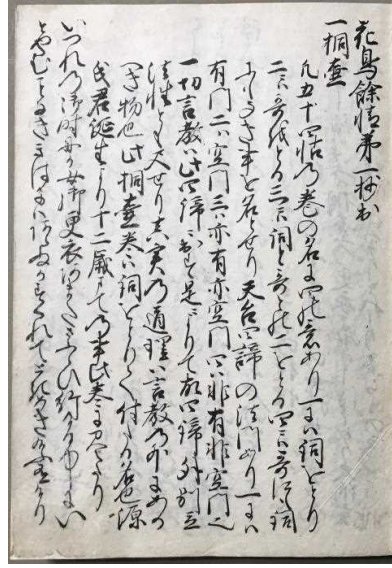
本書は宗祇による抄出本で07『河海抄〔抄出〕』と一具。巻末の識語「此四帖者、予五十有余之比、河海花鳥之中令抄出者也、今八旬之末、門弟有宗碩云、道之志依異他、両部之抄出所讓置也明応九年六月九日 宗祇〔在判〕」とあり、宗祇は50歳を過ぎて『河海抄』『花鳥余情』の抄出本を作成、80歳の頃に門弟宗碩に譲ったという成立背景がわかる。『河海抄』と『花鳥余情』の伝本は多数存在するが、宗祇による抄出本の伝本は少ない。

延寿王院は宗祇や宗碩も訪れた太宰府（安楽寺）天満宮の宿坊。同寺留守職の大鳥居家の旧蔵本。太宰府天満宮には多くの文人が参詣したが、宗祇や宗碩も訪れている。

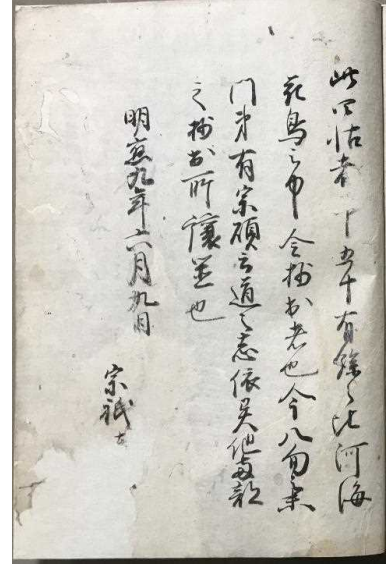




『河海抄』〔抄出〕



『花鳥余情』〔抄出〕



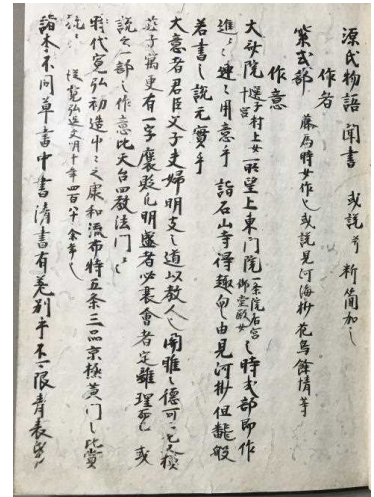
宗祇による識語

09『弄花抄』 三条西実隆著 存桐壺卷～葵卷〔室町後期〕写

袋綴1冊。浅葱色表紙（縦27.7×横20.7cm）。外題なく、「自桐壺至葵」と墨書。内題なし。料紙、楮紙。毎半葉13行、字高約24.6糎。巻末に印主不明の壺形の朱印を捺す。

著者三条西実隆は公卿、古典学者。康正元（1455）～天文6年（1537）、83歳。本書は一条兼良と宗祇の講釈をまとめた肖柏の聞書をもとに執筆、その後07『河海抄』08『花鳥余情』も参照しつつ、改定・増補を重ねていき、現在の形になったと考えられている。書名は肖柏の号「弄花軒」にちなむ。鶴見大学本は、第3類の増補本系統の伝本と見られるが、相違点もあり、なお研究の余地がある。

実隆は後に『細流抄』を作成、続いて息子公条による『明星抄』、実枝（実隆の孫）による『山下水』が著され、三条西家の源氏学が確立されていく。（海老澤・岡澤・小笠原・鈴木・鶴岡）

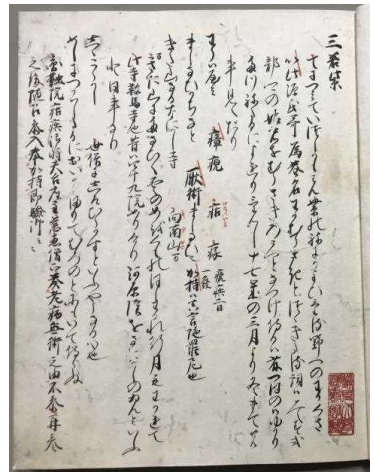


10『三源一覽』 富小路俊通著 存巻2〔室町後期〕写

袋綴1冊。黄土色表紙（縦27.3×横21.9cm）。外題、表紙左肩「〔三源〕一覽」。内題、なし。料紙、楮紙（総裏打）。毎半葉16行、字高約23.4糎。巻2（若菜～葵）の零本。

著者富小路俊通は公家、歌人。連歌、蹴鞠、医学にも通じていた。生年未詳～永正10年（1514）。『実隆公記』明応5年（1496）11月の記事に、師である実隆に序文を依頼し、受け取ったことが見られ、その頃の成立と推定される。

08『花鳥余情』を主として07『河海抄』の説を併記し、05『紫明抄』をも参照して出来た諸注修正で、時に俊通自身の意見も加える。素寂、善成、兼良の三賢の説からなるので「三賢一覽」ともいう。鶴見大学本は、文頭に朱の目印（『花』右斜線・『河』点・『紫』左斜線）があり、出典が確認できる。（秋山・阿部・木内・佐藤・島脇）

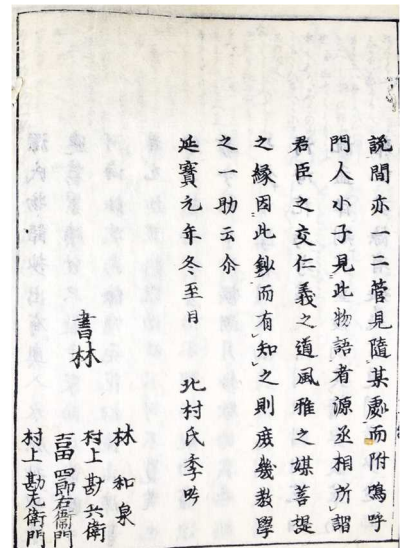


## IV 刊行された注釈書 ——弓・絵巻の「競ひ」

### 11 『湖月抄』北村季吟著 大本 60 卷 60 冊

延宝元年 [1673] 跋刊 (京都、林和泉・村上勘兵衛・吉田四郎右衛門・村上勘左衛門)

北村季吟(1624-1705)による『源氏物語』の注釈書。青表紙系統の本文に、古注・師説・自説を記す。注釈のほかに、「発端」「表白」「源氏物語年立」「源氏物語系図」「雲隠説」を含む。書名の由来は、紫式部が石山寺に参籠した折、十五夜の月が湖水に映り、そこから物語の想を得たとする伝説による。本居宣長や柳亭種彦など、多くの知識人が本書を読んでおり、戦前まで長く流布した。著者の季吟は江戸前期の幕府歌学方で、俳人・歌人・和学者として知られる。三条西公条・箕形如庵・松永貞徳から教えを受け、和漢の学問に精通した。そのような学統に連なるだけに、『細流抄』『孟津抄』を中心にしつつ、『河海抄』『花鳥余情』等の諸注を本書に用いている。このほかにも、古典の注釈書を数多く著しており、主な著作に『徒然草文段抄』、『枕草子春曙抄』、『八代集抄』等がある。



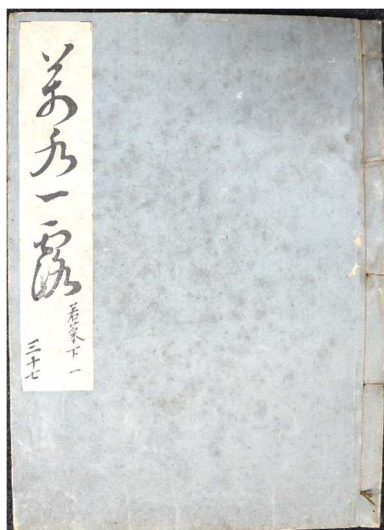
さて、鶴大本の刊記には「村上勘左衛門／林和泉／吉田四郎右衛門／村上勘兵衛」(図版参照)とあるが、このほかに「吉田四郎衛門」の箇所「八尾勘兵衛」とある版が存する。刷りの状態や、刊記部分に入木訂正跡が認められることから、初版が八尾版でのちに吉田版が刊行されたと考えられる。

展示箇所は「花宴」において右大臣邸で催された「弓の結(けち)」の注釈箇所である。「弓の結」とは、射手が左右に別れて、弓の腕を競う競技のことである。右大臣が自邸で催し、新王をはじめ高官を多く招待したとあることから、見世物として用意した場だと分かる。宴後、邸内で酔いを醒ましていた源氏は朧月夜を発見し、几帳越しに手をとる。(市川・木村)

【参考文献】伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂出版、2001年)、清水婦久子『源氏物語版本の研究』(和泉書院、2003年)

### 12 『源氏物語聞書』能登永閑著 大本 11 冊 (若菜上～幻の 11 卷存)

〔寛文3年 [1663] 刊(京、村上平楽寺)・江戸中期印〕



【図版】鶴大本 表紙

原装刷題簽を左肩に貼付した浅葱色無地表紙(26.8×19.5 糎)。全 54 卷のうち、本学は 35～45 卷の計 11 冊を所蔵する。外題(原装刷題簽)「万水一露」、内題「源氏物語聞書」。松永貞徳が跋文を記して出版させた源氏物語の注釈書。注釈そのものは、室町時代に活躍した連歌師の能登永閑が、師の宗碩から伝受した注と古注に自説を加えたものである。写本の段階では、抄出本文とその注釈とで構成されていたが、版本として刊行される際に、源氏物語の全本文が付された。

鶴大本は欠本ゆえに刊記を欠くが、版種としては(1)無刊記本と、(2)「寛文三稔発御霜月吉旦／開板之／二条通玉屋町村上平楽寺」の刊記を有する寛文3年(1663)村上平楽寺版とが確認されている。よって、本書もそのいずれかであると推察される。寛文3年版である国立国会図書館蔵本・早稲田大学図書館蔵本と比較した



ところ、鶴大本の方が刷りの状態が良くないことがわかった。例えば、鶴大本3丁表の「見てや」の部分は判読できない刷りだが、国会本・早大本でははっきりと「見てや」と読み取れる。また、早大本と国会本では中央に貼られていた題簽が、鶴大本では左肩に移動していることや、国会本・早大本で紺地であった表紙が、鶴大本では浅葱色に変わっている点も、鶴大本の刷りの新しさを物語る。『源氏物語』の題簽は写本のみならず、近世前期までに刊行された版本も、ほぼ例外なく中央に貼付されており、浅葱色表紙も近世前期までに出版された歌書に用いられることは珍しい。よって、本学所蔵本は寛文3年版の後刷本であると考えられる。

さて、松永貞徳が付した跋文によると、『源氏物語』を理解するのに必須の注釈書は『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』『細流抄』であるが、それらをすべて所持するのは困難であると思われていたところ、宗碩の門人能登永閑が肝心な注記は省略することなく、法華経二十八品に模して28冊にまとめたものが本書であるという。貞徳はすでに存在していた『万水一露』（源氏物語聞書）を整理して出版したと述べているが、実際は注記などを相当増補したり、訂正したりしたのではないかと考えられている。国会図書館蔵本（30冊、子-5）は、永閑自身によって記された本来の姿を留める写本として知られるが、それに貞徳が多くの古注を増補し、抄出本文ではなく全本文を引用したものが版本『源氏物語聞書』である。また、その本文は寛永・正保頃（1624～48）に刊行された無跋無刊記本に極めて似ていることも明らかにされている。

展示箇所は「若菜下」の冒頭で、六条院邸で催された競射の場面である。女三宮へ思いを寄せる柏木の、心ここにあらずといった様子が描かれる。（海老澤・小笠原）

【参考文献】清水婦久子『源氏物語版本の研究』（和泉書院、2003年）、伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』（東京堂出版、2001年）、今井卓爾等編『源氏物語講座8源氏物語の本文と受容』（勉誠社、1992年）、秋山虔編『源氏物語事典』（学燈社、1985年）

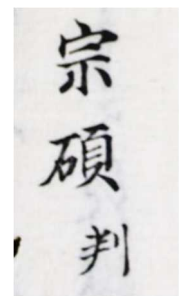
### 13『源氏男女装束抄』宗碩著 大本1冊 享保2年[1717]跋刊（京都、唐本屋八郎兵衛）

『源氏物語』の装束に関する考証で、多くは『河海抄』『花鳥余情』『細流抄』からの引用。著者の宗碩は連歌師であり、永正14年（1517）に藤原祐梁の求めにより作成された。『源氏男女装束抄』には、さまざまな版があるが、とりわけ享保2年版の現存数が多い。これは、他版には見られない注釈書が用いられている点に特徴がある。

さて、本学は4点（以下、A・B・C・D本と称する）を所蔵する。A本・B本・C本は、すべて半紙本の3巻3冊本である。いずれも刊年が元禄9年であり、本文にも違いがない。さらに3種とも「末摘花」と「賢木」が目録から抜け落ちている。このように本文は酷似するが、A本・B本とC本との間には明らかな違いがある。たとえば、A本・B本には壺井義知の印記が模刻されてあるが、C版では朱印が押されている。また、図版のように、C本の元奥書には宗碩の花押が模刻されているがA本・B本では「判」と省略されている。ここからA・B本とC本が別版であることは明らかである。また、D本は、京都の唐本屋八郎兵衛が享保2年に出版した大本1冊本であるが、各巻の冒頭にそれぞれ目録が付されていることから全3巻であることがわかる。A～C本で確認された目録部分の欠落は訂正されており、新たに頭注が付され、他版にはない序文も付されている。

展示箇所は「絵合」の一場面である。冷泉帝の御前で、源氏が親代わりを務める梅壺女御（秋好中宮）と、権中納言（頭中将）の娘である弘徽殿女御の両陣によって、絵画の優劣を競う絵合が催された。勝負は源氏が出した須磨の絵日記によって、梅壺方が勝利を収める。絵画をめぐる美しい競いに、色とりどりの衣装が華を添える。（作間・水元）

【参考文献】伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』（東京堂出版、2001年）



A・B本



C本

## V さまざまな絵入りの梗概書 —舞・競馬の「競ひ」

### 14『源氏小鏡』 大本 3 卷 3 冊 明暦 3 年 [1657] 刊 (京都、安田十兵衛)

源氏物語の絵入りの梗概書・注釈書。南北朝時代の成立か。著者未詳。紫式部や藤原俊成、定家作とする説があるが、一般的には藤原長親（耕雲）が足利義持（勝定院）に献じたものと考えられてきた。増補改訂者には宗祇、紹巴らなどがいる。その内容は、巻順に物語の梗概を簡潔にまとめ、主要な和歌を引用したものである。各巻に連歌寄合の語を収めている点は、同じ梗概書である『源氏大鏡』や『源氏物語提要』などとは異なる。絵入『源氏小鏡』は、江戸時代を通して広く読まれ、梗概書としてはもっとも伝本が多く、本文異同も多数存在することで知られる。その版本を、吉田幸一氏は以下のように分類する。

#### 第 1 類 上方版大本

〔イ〕 明暦 3 年 (1657) 刊安田十兵衛版

〔ロ〕 明暦 3 年浅見吉兵衛・吉田三郎兵衛の相版

#### 第 2 類 上方版小本

〔ハ〕 寛文 6 年 (1666) 版

〔二〕 寛延 4 年 (1751) 吉田・加賀屋相版

〔ホ〕 文政 6 年 (1823) 加賀屋版

#### 第 3 類 江戸版大本

〔ヘ〕 延宝 3 年 (1675) 鶴屋版

〔ト〕 鶴屋版

#### 第 4 類 江戸版小本

〔チ〕 文林堂須原屋版



【図版】 鶴大本『源氏小鏡』

(巻中「御幸」第 16 丁裏・17 丁表)

このうち鶴見大学は〔イ〕〔ハ〕〔ヘ〕の『源氏小鏡』を所蔵するが、本解題では上方版である〔イ〕と〔ハ〕の比較を行った。〔イ〕は毎半葉 13 行、1 首 2 行書で、一部分に朱声点が施される。【図版】のように、1 丁に本文と挿絵が混在しているのが特徴である。岩坪健氏はこの件に関して、「明暦版の挿絵は、すべて上部に広い空間があり、その個所には一面に横線が引かれているだけなので、そこには本文を入れても支障はない。ただし先に絵を版木に彫ると、その横線部分を削り、埋め木をしないと本文を彫れない。それは面倒なので、先に本文を彫り、あらかじめ一巻につき挿絵用に半丁（厳密には十行分）ずつ空け、絵の前で文章が終わるようにしたが、止むを得ない場合は絵を置くスペースの上部に本文を入れたと推定できる」とする。また、〔イ〕には、物語に登場しない男児が描かれていることも指摘されており、実際に鶴大本の明暦版上巻には挿絵 20 箇中 5 箇、中巻には 25 箇中 1 箇、下巻には 10 箇中 3 箇にその子供が描かれていた。物語に登場しない男児が描かれる理由について、岩坪氏は平安時代以降身分の高い者には従者が大勢おり、その中には子供も含まれていたことから、そういった人物である可能性を示した。さらに〔イ〕と〔ハ〕とを比較すると、挿絵の数や構図が異なっている場合もあった。明暦版中巻の挿絵数が 25 箇なのに対して、寛文版中巻は 24 箇であった。ほかにも、挿絵に描かれる人の数や車の位置、屋敷の構造などにも違いがある。これは小本の寛文版が出版される際に、大本である明暦版の挿絵をそのまま使用すると大きさが合わないため、削ったのではないかと考えられている。

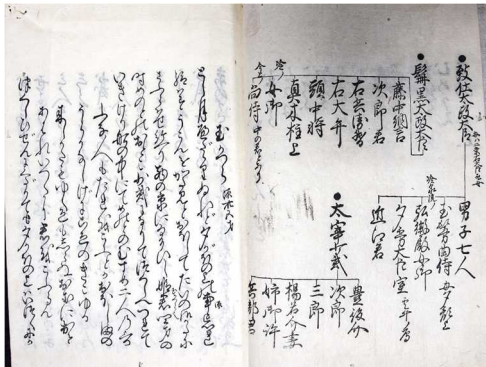
展示箇所は「紅葉賀」の一場面である。朱雀院五十賀の祝典へ参加できない藤壺を気の毒に思った桐壺帝は、宮中で試楽（予行練習）を行った。挿絵は御前で光源氏と頭中将が青海波を舞っているところである。舞を見つめる藤壺は、この時光源氏の子を宿している。（高柳・山崎）

【参考文献】中野幸一『絵入本源氏物語考』（青裳堂書店、1987 年）、岩坪健「整版『源氏小鏡』」（神戸親和女子大学附属図書館蔵解題・翻刻）——付、『源氏小鏡』の挿し絵（『親和国文』36、2001 年）

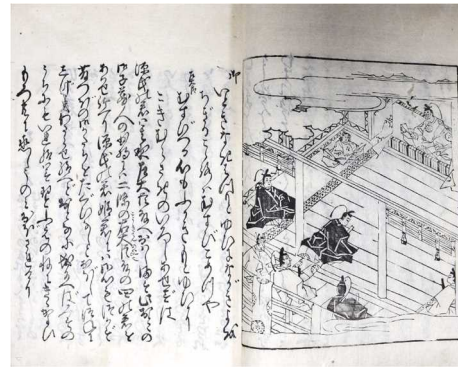


15 『おさな源氏』 野々口立圃著 大本5巻10冊 寛文10年[1670]刊(京都、山本義兵衛)

紺色無地表面紙、五つ目綴の大本(27.0×18.3 糎)。外題「おさなけんし」。立圃が自身の著書『十帖源氏』を簡略化した、『源氏物語』の梗概書。各冊の冒頭部分には、登場人物の系図(図A)を載せ、所々図Bのように挿絵を配する。



【図A】



【図B】

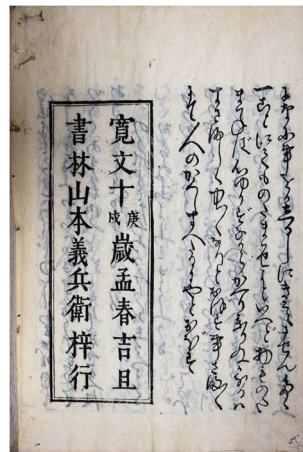
著者の野々口立圃は、本名親重、通称は庄右衛門・宗右衛門・市兵衛・次郎左衛門などという。文禄4年(1595)に生まれ、寛文9年(1669)に75歳で亡くなった。

『おさな源氏』の

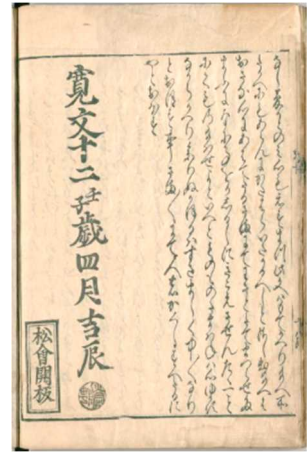
諸版は、寛文6年版・寛文10年版・寛文12年版・延宝9年版など多数あるが、上方版と江戸版に分かれることで知られる。江戸時代の17世紀前半(寛永頃)まで出版の中心は京都・大阪(上方地方)にあり、17世紀半ば以降(元禄頃)、その中心が江戸に移行したとされる。京都・大阪の上方地方の出版物を上方版というのに対して、江戸で出版された本を江戸版という。江戸版は、特に元禄期までに刊行されたものを指すことが多い。

上方版の『おさな源氏』の1つに、「寛文<sub>辛丑</sub>年春立圃」という刊記署名を有する寛文元年版がある(広島大蔵)。この版は、著者の立圃自身が文章も挿画も版下も書いた初版本とされる。以下、諸本のうち、早稲田大学図書館蔵本(早大本)ならびに国立国会図書館蔵本(国会本)と鶴大本を比較し、鶴大本の諸版における位置づけまとめる。

まず、鶴大本の刊記には【図C】のごとく「寛文十(戊/庚)歳孟春吉旦/書林山本義兵衛梓行」(木記)とあり、早大本には「初春日/松会開版」、国会本には【図D】のごとく「寛文十二(壬/子)歳四月吉辰/松会開版」とあった。松会版であることから、早大本と国会本は、いわゆる江戸版であることがわかる。江戸版は立圃の自筆版下ではなく、字体も行数も異なっている。さらに、上方版には見られない、匡郭も確認できる。一方で鶴大本には匡郭はなく、「山本義兵衛」が刊行していることから、上方版であることは明らかである。上方版『おさな源氏』は5種あるが、本書は寛文元年立圃自署本に次いで出版されたものと位置づけられる。なお、山本義兵衛版には5冊本と10冊本とがある。



【図C】 鶴大本



【図D】 国会本

展示箇所は蜚巻の一場面。六条院(光源氏の邸宅)の夏の町には、花散里と夕霧が住んでいたが、のちに玉鬘が西の対に加わった。その東側には馬場殿が設けられおり、端午の節会には、宮中の儀式を模して騎射や競馬が催された。挿絵に描かれた競馬は、左右に分れて各1騎ずつが直線の馬場で速さを競い、10番勝負で左右いずれかの勝ちを決めるというもの。(鶴岡・鈴木)

【参考文献】清水婦久子『源氏物語版本の研究』(和泉書院、2003年)、伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂出版、2001年)

## VI 楽しまれた『源氏物語』——場所取り・蹴鞠・絵合の「競ひ」

### 16 『金玉源氏絵宝枕』 小島宗賢・鈴木信房編 大本3巻3冊(巻4欠)

〔正徳3年[1713]刊(京都、大野木市兵衛)〕\*上方版『源氏鬢鏡』の改題本。

『源氏小鏡』から主に巻名の由来を記した箇所を引用し、各巻の内容を詠んだ貞門俳人による発句を掲載する。編者の小島宗賢・鈴木信房は松永貞徳門人。上方版『源氏鬢鏡』の改題本で、正徳3年(1713)に大野木市兵衛によって刊行された、同書には上方版と江戸版とがあり、いずれも最も早い刊年は万治3年版であるが、初版は度々市兵衛によって刊行された上方版とされる。

展示箇所は葵巻の一場面である。賀茂祭の際に、源氏の正妻である葵の上と、愛人の六条御息所の双方の従者の間で起こった車争いを描く。葵巻で句の作者として記される「慶友」は半井ト養(1607~79)の名。祖父は連歌師の牡丹花肖柏で、俳諧を松永貞徳に学び、その後、医師として幕府に仕えた。俳諧のほかに狂歌を詠み、和歌・連歌にも通じた。(加藤)

【参考文献】清水婦久子『源氏物語版本の研究』(和泉書院、2003年)、伊井春樹編『源氏物語注釈書・亨受史事典』(東京堂出版、2001年)

### 17 『源氏大和絵鑑』 菱川師宣画 半紙本1巻1冊〔貞享2年[1685]刊(江戸、鱗形屋)〕

絵本の要素が強い『源氏物語』の梗概書。図Aのように、半葉の右下に帖題、中央の円中に各巻の挿絵が描かれ、円上には頭書が記される。11丁までは「後光明院御製」とする源氏長歌、12丁以降は『源氏小鏡』からあらすじを引用する。

鶴大本は改装表紙で12、13、16、25、26、27丁目が落丁しており、刊記もない。図Bの国会本と比較すると、全27丁であることや、貞享2年(1685)に鱗形屋から刊行された江戸版であることがわかる。挿絵は菱川師宣が描いているが、天和・貞享頃の師宣絵本は、ほぼこの鱗形屋から刊行された。なお、本書には他版が見当たらないことから、限定版として刊行されたのではないとも言われる。その挿絵は、流布本の『源氏物語』のものとは明らかに異なるため、師宣独自のものであると考えられる。

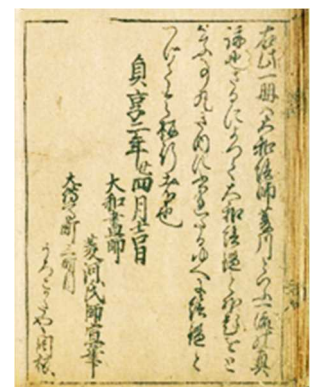
前述した通り、頭書は2つの内容から構成される。前半には後光明院(1633~1654)作と明記された『源氏物語』の帖名を詠み込んだ長歌を載せる。ただし、後光明院は朝廷が衰退した理由に和歌と源氏物語をあげたことで知られ、その典拠も確認できないため、真作か否かは定かではない。また、後半は『源氏小鏡』からの引用である。各帖のあらすじに対応する箇所を引用するが、頭書の欄に収まるように短くしたり、途中で終わらせたりするなどの改変が施されている。また「若菜」巻では上下巻が反対に引かれていたり、引用元が不明であったりする帖もある。なお、本書は、草双紙を多く出した鱗形屋から刊行されていることや、全丁に絵が入っていることから、子供を含めた大衆向けに制作されたものだと推察される。

展示箇所は若菜上巻の挿絵で、蹴鞠に興じる若い男たちとその様子を御簾越しに眺める女三宮が描かれる。猫によって御簾が引き上げられ、女三宮が柏木に姿を見られてしまう。蹴鞠は鹿皮製の鞠を一定の高さで蹴り続け、その回数を競う競技であった。(秋山・木内)

【参考文献】伊井春樹編『源氏物語注釈書・亨受史事典』(東京堂出版、2001年)



【図A】鶴大本『源氏大和絵鑑』



【図B】国会本



## 18『源氏絵合』横本1冊 宝暦4年[1754]序刊（〔大坂〕）

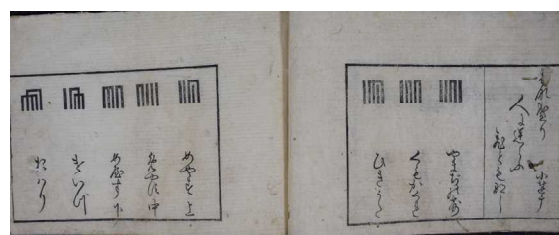
絵合とは、「左右の二組に分かれて判者を定め、互いに持ち寄った絵を出し合い、その優劣を競う遊戯」をいう。近世になると、題に合わせて各自趣向を凝らした絵を画工などに書かせたものに、評者が点をつけ互いに評し合う遊びとして町人の間で流行した。また「源氏絵合」は、「源氏合」ともいい、『源氏物語』54帖の絵が描かれた一枚刷りの錦絵の上に、巻名を記した54枚の札を順に合わせていくという遊戯の一つである。また、書名に「絵合」を含む作品は多く、俳諧、狂歌、浄瑠璃、遊戯など内容も多岐にわたる。

鶴見大学図書館蔵『源氏の絵合』は、『源氏物語』54帖の巻名とその内容に沿った挿絵が順に描かれている。さらに、見開きの右端ごとに句が挿入されている（図1）。挿絵、句はともにパロディの要素は感じられない。本編に含まれない巻（「山路の露」等）には、絵ではなく源氏香図が使われている



【図1】

（図2）。源氏香図は、冒頭の「げんじ」「ものがたり」より巻名順に使用されているが、「若紫」の次は「末摘花」が飛ばされ、「紅葉賀」となっている。なお、匡郭の寸法に対し、余白が多く取られているが、これは当時流通していた横本の万治本『源氏物語』の大きさに寄せたためであろうか。本書は万治



【図2】

本と同じ紺色表紙で、題簽も同じく中央に貼付されるが、鶴大本の表紙には金泥下絵の剥落跡がみえ（図3）、費用をかけて制作したものであることがわかる。



【図3】

『源氏の絵合』の伝本は、東海大学桃園文庫蔵本（1冊）と日本大学図書館蔵本（下巻1冊）等少数に止まる。しかも閲覧が現在制限されているため、同版であるか否かも判然としない。書名についても、日本古典籍総合目録データベースでは統一書名を『源

氏の絵合』（鶴大本も同書名）とするが、東海大本は刊記により『源氏絵合』とする（日大本は不明）。鶴大本は無刊記だが、東海大本は「源氏絵合後編近日常出来 宝暦四年戊正月吉辰 大坂安土町心齋橋 書林本屋宇之松 心齋橋筋高麗橋北へ入 彫刻 市田治兵衛」なる刊記を有するという。また、東海大本の匡郭の寸法は鶴大本とほぼ同じであるが、本自体の寸法は縦横とも4cm程度小さく、丁数も1葉少ない9丁である。さらに、巻名と挿絵、句が配されるという構成は同じであるものの、『源氏物語』の巻名が順不同で並べられ、挿入される句も違っているようである。

なお、東海大本の刊記にみられる「後編近日常出来」と記されたものが、日大本（下巻1冊）に該当する可能性もある。東海大本を刊行した「本屋宇之松」は、他に出版物の記録が見当たらず、『源氏絵合』の開板願も確認できなかった。『大坂本屋仲間記録』の差定帳により、宝暦6年5月に本屋仲間株を川崎屋安兵衛へ譲渡した記録が見えるのみである。

なお、鶴大本の序には、「春頗亭主人書／宝暦四の／太郎月」とあり、東海大本と同時期の刊行であることが推察される。春頗亭主人という人物は伝未詳であるものの、おそらくは指導者的立場にあった人物で、年頭の配り本として本書を刊行したのだろうか。当時、雑俳絵合が流行していたこともあり、「閑暇有世の人々のもて遊び草に備ふるもの」（序より）として、源氏香図を取り入れるなどの趣向も凝らしながら、本書は制作されたものと考えられる。（阿部・高松）

【参考文献】大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第12巻・第13巻（清文堂出版、1987～1988年）、伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』（東京堂出版、2001年）

## 『源氏物語』における主な「競ひ」

\*数字は『新編日本古典文学全集』（小学館）の頁数

### 1. 歌合 \*「東屋」19頁

左右に分れて出題された歌題を歌に詠み、これを合せ比べて優劣を競う。

### 2. 絵合…「絵合」

平安時代の貴族の間で行われた物合（ものあわせ）の一種。歌合と同様に、左右に分れて小画を出し合い、その優劣を競うもの。

### 3. 韻塞ぎ…「賢木」140頁

平安時代に流行した、漢詩の中の韻字を隠しておいて、当てさせる文字遊び。

### 4. 春秋の争い…「胡蝶」170頁前後

春と秋についての優劣の論議。紫の上と秋好中宮との春秋の風流な争い。紫の上が春を推し中宮は秋推した。中宮が紫の上に勝ちを譲る。

### 5. 薫物合…「梅枝」403頁

各自が持ち寄った薫物をたき、判者が香りと銘とを総合して優劣を判定する遊び。

### 6. 弓の結…「花宴」363頁、「蛭」205頁、「若菜下」（153頁以降）

射手を左右に分け、交互に弓を射させて勝負を争うこと。

### 7. 碁…「空蟬」

空蟬と軒端荻が碁を打つ場面が描かれる。

### 8. 舞…「紅葉賀」

源氏と頭中将が御前で青海波を舞い競演する。

### 9. 雅楽…「末摘花」

源氏と頭中将が末摘花をめぐり、雅楽で競う様子が描かれる。

### 10. 車争い…「葵」

賀茂祭で、源氏の正妻である葵の上と、愛人の六条御息所の双方の従者の間で起こった車争い

### 11. 出衣（いだしぎぬ）…「初音」159頁、「真木柱」382頁

男踏歌の見物するものたちの出衣がいずれも美しいさまが描かれる。

### 12. 風流…「藤裏葉」452頁

明石の姫君が入内するため、殿上人は風流さの「いどみ所」だと思ふ。

### 13. 趣向…「柏木」299頁

薫の産養の儀式を御方々が「いどましき見えつつ」趣向を凝らす。

### 14. さる競ひ（出家）…「鈴虫」380頁

女三の宮の出家により、周囲の者たちが競うように出家を願ひ出る。

### 15. 恋

源氏と頭中将や、浮舟をめぐる薫と匂宮との争いなど。

## 講演会・ギャラートーク

[日時] 2020年2月15日 13時～14時

[会場] 図書館 B1F ホール

[講演題目] 「木枯らしに吹きあはす笛の音——「雨夜の品定め」の和歌解釈——」

[講師] 田口暢之（本学文学部講師）



## 凡 例

1. 書目一覧は、原則として書名、著者名、書型・装訂、巻冊数、刊写年（刊写者）の順で記し、特記事項は「\*」以降にまとめた。
2. 編著者が未詳の場合は、著者名欄を省略した。また、『源氏物語』の著者名も省略した。
3. 綴葉装・軸装・疊物・額装の場合は、巻数欄を省略した。
4. 原則として袋綴である場合は書型を記し、それ以外の場合は装訂を記した。
5. 書名は原則として『国書総目録』に拠り、未記載のものは鶴見大学整理書名を記した。
6. [ ] は推定記載に付した。
7. 『源氏物語』の巻名は通行の表記に統一した。例) 「もみぢの賀」→「紅葉賀」
8. 漢字は通行の字体に統一した。
9. 本展示における江戸の時代区分は以下の通りとした。  
江戸初期…慶長～寛永[1643]、江戸前期…正保～元禄[1703]、  
江戸中期…宝永～天明[1788]、江戸後期…寛政～天保[1843]、江戸末期…弘化～慶応
10. 解題執筆や出展書目を選出する際には、本学で開催された以下の展示図録を参照した。
  - ・『芸林拾葉 鶴見大学図書館新築記念貴重書図録』（1986年）
  - ・『大学院文学研究科開設記念 鶴見大学図書館蔵貴重書展目録』（1989年）
  - ・『古典籍と古筆切 鶴見大学蔵貴重書展解説図録』（1994年）
  - ・『学校法人総持学園創立80周年記念和歌と物語 鶴見大学図書館蔵貴重書80選』（2004年）

## 展示担当者

**【監修】** \*五十音順。ローマ数字は監修担当コーナーの番号。

伊倉 史人（トキコミュニケーション学科教授）…Ⅲ・ホスターデザイン

加藤 弓枝（トキコミュニケーション学科准教授）…Ⅱ・Ⅳ～Ⅵ

田口 暢之（日本文学科講師）…Ⅰ・展示統括・講演会

**【解題執筆】** \*学年・五十音順。\*主に2019年度「古写本演習」「古版本演習」の履修生。

〈大学院日本文学専攻〉	〈トキコミュニケーション学科3年〉	佐藤恵里佳
河田 翔子（後期課程）	秋山 陽	佐保田幸汰
海野亜理沙（前期課程）	阿部あいら	島脇 里奈
〈科目等履修生〉	市川なつみ	鈴木 壮志
高松万喜子	海老澤 拓	槻木淳之介
〈トキコミュニケーション学科4年〉	岡澤 邑	土田 瑛
荒木田季生	小笠原翔大	鶴岡 大輝
井上 立也	木内 鈴華	平間 琳奈
大竹 将哉	木村 凧沙	水元 晴菜
高柳 絢香	蔵野 春輝	
山崎 聖未	作間 春華	

第 154 回貴重書展  
源氏物語研究所共同開催

## 『源氏物語』の「競ひ」

発行日 令和 2 年[2020]1 月 15 日 第 1 版

編集・発行 鶴見大学図書館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見 2 丁目 1-3